

体操競技・技の世界と

関わり続けて想うこと

竹田 幸夫

新 26 回生 (1974 年卒業)

私は、新宿高校で体操競技というスポーツに出会いました。それ以来 40 数年経った今でも体操競技と関わっています。これまでの自分の人生を振り返ってみて、好きなスポーツ一筋に関わり続けることができ、これほど幸せなことはいないとさえ思っています。

思い起こせば、私が体操競技にのめり込む伏線は、小学生の頃にありました。それは、テレビで見た「東京オリンピック・パラリンピック」の体操競技の一場面です。かすかな記憶として残っているのは、個人総合チャンピオンとなり金メダルを獲得した遠藤幸雄選手の姿でした。私の名前と同じ「ゆきお」だったことがより印象を強くしたのかもしれません。これを契機に、学校の休み時間になると鉄棒遊びやバク転に興じていました。その後しばらくは、体操競技に出会えずに熱が冷めかけていましたが、高校の部活動として私と体操競技との関わりが始まりました。

高校 3 年間体操競技に没頭したせいか、大学でも体操競技を続けてみたいという思いが強くなりました。そのことを部の顧問であった松崎吉照先生に相談したところ、先生からも勧められ、大学は体育の道に進むことを決意しました。その後無事に大学に入学はできたものの、一緒に入学した仲間や上級生と自分の実力差に愕然となりました。しかし、レベルの高い環境で必死にやっていると、何とかなるものです。入学当初こそ怖気づいていましたが、そのうち高校時代には思いもよらなかった難度の高い技も習得できるようになりました。残念ながら学生時代はレギュラー選手にはなれませんでした。が、大学卒業後も競技を続け、1 度だけ全日本体操競技選手権大会に出場することができました。選手としてこれが最大の成果でした。

現在では、駒澤大学の教員として勤務しながら、体操競技部の監督として選手の指導に当たっています。皆さんもご存じの通り、体操競技の技は日々進化します。私が選手をやっていた頃は、2 回宙返りに 1 回ひねりが加わったいわゆる「ムーンサルト」が最高難度の時代でした。今では「シライ」という名前がついた 4 回ひねりが発表される時代です。2 回宙返りには 3 回ひねりが加えられるまでに技が発展してきました。私が選手をやめてだいぶ経ちますが、指導者として自分がやったこともない難しい技を教えることができるのは、日々選手とともに頭の中で練習を続けているからでしょう。

昨年開催されたリオデジャネイロ オリンピック・パラリンピックでは、日本の選手が大活躍をしてくれました。エースの内村航平選手をはじめ新鋭の白井健三選手たちです。皆さんもテレビで体操競技を観戦したことがあると思います。大会での華やかな世界とは異なり、そこに至るまでには日々の地道な練習の積み重ねが必要です。毎日、同じ技を繰り返し練習しても、なかなか進歩が見られないことも多々あります。それでもあきらめずに練習を続けていくと、ある瞬間に技を成功させるコツが分かることがあります。このようにコツコツと積み上げていって演技として仕上げていく楽しさに魅力を感じ、このスポーツから離れられずに今日に至っています。

私は、高校時代に体操競技というスポーツに出会い、その後も一筋に関わり続けてきました。そのお蔭で多くの魅力ある人と出会うことができました。小学生のときにテレビで見た遠藤幸雄さんとも一緒にお仕事をする機会にも恵まれました。さらには、役員としてオリンピック選手を支援するというわくわくする経験もできました。これからどのような道に進もうかと考えている高校生みなさん、自分が今取り組んでいる好きな世界、没頭できる世界に進んでみませんか。少し勇気を出して 1 歩踏み出して根気よくやり続けていくと、自分の周りの世界が広がって魅力的な人と出会い、わくわくする経験ができるようになりますよ。

(朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。)

体操競技・技の世界と

関わり続けて想うこと

竹田 幸夫

新 26 回生 (1974 年卒業)

私は、新宿高校で体操競技というスポーツに出会いました。それ以来 40 数年経った今でも体操競技と関わっています。これまでの自分の人生を振り返ってみて、好きなスポーツ一筋に関わり続けることができ、これほど幸せなことはないとさえ思っています。

思い起こせば、私が体操競技にのめり込む伏線は、小学生の頃にありました。それは、テレビで見た「東京オリンピック・パラリンピック」の体操競技の一場面です。かすかな記憶として残っているのは、個人総合チャンピオンとなり金メダルを獲得した遠藤幸雄選手の姿でした。私の名前と同じ「ゆきお」だったことがより印象を強くしたのかもしれません。これを契機に、学校の休み時間になると鉄棒遊びやバク転に興じていました。その後しばらくは、体操競技に出会えずに熱が冷めかけていましたが、高校の部活動として私と体操競技との関わりが始まりました。

高校 3 年間体操競技に没頭したせいか、大学でも体操競技を続けてみたいという思いが強くなりました。そのことを部の顧問であった松崎吉照先生に相談したところ、先生からも勧められ、大学は体育の道に進むことを決意しました。その後無事に大学に入学はできたものの、一緒に入学した仲間や上級生と自分の実力差に愕然となりました。しかし、レベルの高い環境で必死にやっていると、何とかなるものです。入学当初こそ怖気づいていましたが、そのうち高校時代には思いもよらなかった難度の高い技も習得できるようになりました。残念ながら学生時代はレギュラー選手にはなれませんでした。大学卒業後も競技を続け、1 度だけ全日本体操競技選手権大会に出場することができました。選手としてこれが最大の成果でした。

現在では、駒澤大学の教員として勤務しながら、体操競技部の監督として選手の指導に当たっています。皆さんもご存じの通り、体操競技の技は日々進化します。私が選手をやっていた頃は、2 回宙返りに 1 回ひねりが加わったいわゆる「ムーンサルト」が最高難度の時代でした。今では「シライ」という名前がついた 4 回ひねりが発表される時代です。2 回宙返りには 3 回ひねりが加えられるまでに技が発展してきました。私が選手をやめてだいぶ経ちますが、指導者として自分がやったこともない難しい技を教えることができるのは、日々選手とともに頭の中で練習を続けているからでしょう。

昨年開催されたリオデジャネイロ オリンピック・パラリンピックでは、日本の選手が大活躍をしてくれました。エースの内村航平選手をはじめ新鋭の白井健三選手たちです。皆さんもテレビで体操競技を観戦したことがあると思います。大会での華やかな世界とは異なり、そこに至るまでには日々の地道な練習の積み重ねが必要です。毎日、同じ技を繰り返し練習しても、なかなか進歩が見られないことも多々あります。それでもあきらめずに練習を続けていくと、ある瞬間に技を成功させるコツが分かることがあります。このようにコツコツと積み上げていって演技として仕上げていく楽しさに魅力を感じ、このスポーツから離れられずに今日に至っています。

私は、高校時代に体操競技というスポーツに出会い、その後も一筋に関わり続けてきました。そのお蔭で多くの魅力ある人と出会うことができました。小学生のときにテレビで見た遠藤幸雄さんとも一緒にお仕事をする機会にも恵まれました。さらには、役員としてオリンピック選手を支援するというわくわくする経験もできました。これからどのような道に進もうかと考えている高校生みなさん、自分が今取り組んでいる好きな世界、没頭できる世界に進んでみませんか。少し勇気を出して 1 歩踏み出して根気よくやり続けていくと、自分の周りの世界が広がって魅力的な人と出会い、わくわくする経験ができるようになりますよ。

(朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。)